

# オンライン短期海外研修の教育的効果 ー英語スピーキング能力に焦点をあててー<sup>†</sup>

ハドリー 浩美\*

新潟大学教育基盤機構国際センター\*

コロナ禍により、短期海外研修プログラムの多くがオンライン上で提供されるようになった。ハドリー（2022）では、海外の大学が提供する既成のオンライン短期英語研修プログラムに参加した学生を対象に、研修がもたらす言語運用能力以外の側面における教育的効果について検証した。本稿では、言語運用能力の側面に焦点をあて、Versant Speaking Test を用いて研修参加前後の英語スピーキング能力の伸長について検証する。テスト結果からは、研修前のスピーキング能力が低めだったグループにおいて一定の向上が認められた。

**キーワード**：既成のオンライン短期海外研修，言語運用能力，英語スピーキングテスト

## 1. 背景と目的

2020年春頃から新型コロナウイルス・パンデミックの影響を受けて渡航をともなう留学プログラムが中止となり、学生にとってハードルが低く参加しやすかった短期海外研修プログラムも募集停止となった。そのような中で、海外の大学教員と共同でプログラムを設計して実施する COIL（Collaborative Online International Learning, オンライン国際協働学習）の手法を取り入れたプログラムが成果を上げている（Ueda et al., 2021; 植村ほか, 2021）。加えて、コロナ禍以前に海外の大学が開発して日本人学生等に提供していた、既製の画一的な短期海外研修プログラムについても、次第にオンライン上での提供が開始されるようになった。しかし、そのようなカスタマイズされていないオンライン短期研修には、渡航型再開後もひとつの選択肢として提供し続けるだけの教育的価値はたしてあるだろうか。

ハドリー（2022）では、2021年夏に現地プログラムの代替として提供された既成のオンライン・プログラムのうち、筆者が担当した2つのオンライン短期英語研修を事例として、JASSO方式の自己評価アンケート（独立行政法人日本学生支援機構, n.d.）や研修参加後のリフレクション・ペーパー等から、その教育的効果

について検証を行った。その結果、2週間足らずの既成のオンライン研修であっても、適切な教育的介入を行うことで気づきを促し、「自ら目標を設定し失敗を恐れず粘り強く行動することができる」能力（独立行政法人日本学生支援機構, n.d.）などが涵養され、大学の教育目標達成に貢献する可能性が示唆された。一方、英語運用能力の伸長については、短期間の研修であったため、実のところ全く期待しておらず成果検証の対象にさえしていなかった。ところが、研修後に英語でグループ・ディスカッションをさせたところ、一人あたりの発話量が研修前と比較して相当増加していることに驚いた。そこで、2022年春の研修参加者には、AIによるスピーキングテストを研修前後に課して、スピーキング能力の向上が認められるかどうかを客観的に検証することにした。本稿ではその結果を報告する。

## 2. 先行研究

従来の渡航型短期海外研修のうち4週間以下の研修では、参加後の英語運用能力に統計上の有意差がなかったという報告（上田, 2021）がある一方で、一定の向上を認めた報告も少なからず存在する（野中, 2008; Kimura, 2009; 田浦ほか, 2009; Llanes & Muñoz, 2009; 木村, 2011; 吉田・小寺, 2011; 鈴木・林, 2014;

大津・佐竹, 2016; Tajima, 2020). しかしながら, 野中 (2005) では, 渡航時の英語運用能力が高めのグループにおいては, 帰国後に伸長が認められなかったという. 上記の野中 (2008), 吉田・小寺 (2011), 大津・佐竹 (2016) においても, 上位群よりも下位群に大きな向上がみられたと報告されている.

スピーキング能力に限ってみると, Shimizu (2000) が他者とのやりとりにおけるスピーキング能力の向上と, 発話量の増加とを報告している. 大塚・根岸 (2009) では流暢さの向上が確認されている. 他方, 田浦ほか (2009) が行ったポーズ分析では, 英語母語話者のスピーキングスタイルに近づいたという結果は得られなかったという.

つぎに, オンライン型の短期海外研修である. 英語運用能力の測定例は今のところ限られているが, 瀬尾 (2021) が, ブルネイの大学の6日間のオンライン研修前後では, 参加者19名のCASECの総合得点(語彙の知識・表現の知識・リスニング)と, リスニングの得点とが有意に上昇したと報告している. 本稿執筆時点では, スピーキング能力に関する測定例は見つからなかった. したがって, 本稿は現在不足しているデータの蓄積に寄与することになる.

### 3. 方法

#### 3.1. 対象プログラムと対象者

対象としたプログラムは, 2021年度春季にニュージーランドの大学が提供した10日間のオンライン英語研修である. 2022年2月21日から3月4日の平日に同期型で実施され, 習熟度別クラスにて英語を学ぶ授業が30時間, 英語でニュージーランドの文化を学ぶ授業が10時間提供された. これに新潟大学での事前研修および事後研修を加え, 所定の成績を収めた参加者には, 正課科目として2単位が付与された.

対象者は全参加者(学部1年生6名, 2年生6名, 計12名)で, うち海外渡航歴のある者は5名であった.

#### 3.2. スピーキングテスト

研修参加者のスピーキング能力を客観的に測定するため, 自動で言語認識と採点とを行うVersant

Speaking Testを採用した. Versant Speaking Testは, 日常的に使用されている英語を聞いて理解し, 分かりやすい(intelligible)英語で母語話者並みのペースで応答する能力を測定するテストで(Pearson Education Inc., 2019), 高い信頼性・妥当性(Downey et al., 2008; Bernstein, Van Moere, & Cheng, 2010; Pearson Education Inc., 2019)と, TOEFL iBTとの高い相関(Dodigovic, 2009)が報告されている. 国内の大学においても学部の英語教育カリキュラム(Owada & Shimizu, 2020)や海外研修プログラムの成果検証(清水・桐村・野澤, 2014)等に用いられている.

まず, 研修者全員にVersant Speaking Testのサンプルテストを事前に受験させた. そのうえで, 研修前および研修後1週間以内で各自の都合の良い時間に, 本試験をオンラインで受験させた. テスト項目は, 音読(8問), 復唱(16問), 質問(24問), 文の構築(10問), 話の要約(3問), 自由回答(2問)で構成され, 受験直後に総合スコアおよび4つの観点別スコアがそれぞれ20点から80点で表示された. 1回のテスト時間は約20分であった.

### 4. 分析結果と考察

まず, 全参加者の総合スコアおよび観点別スコアにおける研修前と研修後の差を分析し, さらに効果量( $r$ )を求めた(表1, 表2). サンプル数が少なく正規性が仮定できないため, 分析にはWilcoxonの符号付順位検定を使用した. その結果, 総合スコアと観点別スコアのいずれにおいても有意差は認められなかった.

つぎに, 参加者を研修前のVersant Speaking Testの総合スコアで下位群(29~40: CEFRA1~A2相当)と上位群(41~54: CEFRA2+~B1+相当)に分けて分析したところ, 下位群の総合スコアおよび流暢さ(fluency)のスコアに有意な差が認められ(表3, 表4), スピーキング能力に一定の向上があったことが示唆された.

表1 研修前・研修後のVersant Speaking Test結果(総合)

評価観点	N	研修前	研修後	Z値	r値
Overall	12	40.50	43.00	-0.94	.19
		(35.25 - 47.00)	(37.00 - 46.50)		

注) 中央値(四分位範囲), Z値 \*  $p < .05$  (該当なし)

表 2 研修前・研修後の Versant Speaking Test 結果 (観点別)

評価観点	<i>N</i>	研修前	研修後	Z 値	<i>r</i> 値
1 Fluency	12	36.00 (26.75 – 46.75)	38.50 (28.75 – 40.00)	-0.05	.01
2 Pronunciation	12	36.00 (31.50 – 46.25)	39.00 (33.50 – 44.25)	-0.66	.14
3 Sentence Mastery	12	44.00 (42.25 – 49.75)	47.50 (44.00 – 50.00)	-1.66	.34
4 Vocabulary	12	45.50 (37.00 – 50.00)	47.00 (40.25 – 51.75)	-1.79	.34

注) 中央値 (四分位範囲)、Z 値 \*  $p < .05$  (該当なし)

表 3 下位群の研修前・研修後の Versant Speaking Test 結果 (総合)

評価観点	<i>N</i>	研修前	研修後	Z 値	<i>r</i> 値
Overall	6	35.50 (29.75 – 38.50)	37.00 (35.75 – 40.75)	-2.03 *	.59

注) 中央値 (四分位範囲)、Z 値 \*  $p < .05$

表 4 下位群の研修前・研修後の Versant Speaking Test 結果 (観点別)

評価観点	<i>N</i>	研修前	研修後	Z 値	<i>r</i> 値
1 Fluency	6	27.50 (23.75 – 36.50)	29.50 (27.25 – 38.50)	-2.07 *	.60
2 Pronunciation	6	32.00 (30.75 – 34.50)	34.00 (33.00 – 36.75)	-1.46	.42
3 Sentence Mastery	6	42.50 (34.50 – 44.00)	44.00 (41.75 – 47.75)	-1.79	.52
4 Vocabulary	6	38.00 (27.75 – 42.75)	41.50 (36.00 – 45.25)	-1.63	.47

注) 中央値 (四分位範囲)、Z 値 \*  $p < .05$

## 5. 今後の展望

本稿では、既成のオンライン短期英語研修への参加前後におけるスピーキング能力の向上を Versant Speaking Test を用いて検証した。下位群のスピーキング能力に一定の伸長が確認されたため、参加申込書の志望理由欄を確認したところ、英語を話せるようになりたいが自信がないといった記述が6名中5名にみられた。研修後の報告書からは、実際に英語を使って他者と意思疎通する楽しさに気づき、不安を克服して間違いを恐れずに挑戦するようになった様子が見えられた。上位群には、自信のなさや不安に関する記述はみられなかった。しかしながら、大塚ほか (2009) の研究では、2週間の渡航型海外研修において不安減少と流暢さ向上との間に相関が確認されるには至っていない。これについては今後の研究課題としたい。

パンデミック収束後には、従来の渡航型にオンライン型を組み込んだ Blended Learning への発展が期待される中、太田 (2021) はコロナ禍で拡大した ICT を活用した取り組みを、国際教育交流におけるデジタル・トランスフォーメーションとして位置付けている。本研究は対象者が少数であることから、あくまでも一事例に過ぎないが、今後データが蓄積されるにつれて、テーラーメイドでない既成のオンライン短期海外研修プログラムであっても、渡航型再開後に提供し続けるだけの教育的効果があるかどうか明らかになるであろう。

## 謝辞

本研究はJSPS科研費19K02882の助成を受けたものです。

## 参考文献

- Bernstein J., Van Moere, A., and Cheng, J. (2010) Validating automated speaking tests. *Language Testing*, 27(3): 355-377
- Dodigovic, M. (2009) Speech Processing Technology in Second Language Testing. *Proceedings of the Conference on Language & Technology 2009* 113-120
- 独立行政法人日本学生支援機構 (n.d.) 留学前・留学後報告書 (派遣学生用) (様式 H-1)  
[https://www.jasso.go.jp/ryugaku/scholarship\\_a/haken/2021.htm](https://www.jasso.go.jp/ryugaku/scholarship_a/haken/2021.htm)  
1 (2021年11月22日参照)
- Downey, R., Farhady, H., Present-Thomas, R., Suzuki, M., and Van Moere, A. (2008) Evaluation of the Usefulness of the Versant for English Test: A Response. *Language Assessment Quarterly*, 5(2): 160-167
- ハドリー浩美 (2022) オンライン短期海外研修の教育的効果：ケーススタディ. 新潟大学言語文化研究, 24: 21-33
- Kimura, K. (2009) The Influences of Studying Abroad on Language Proficiency and the Use of Language Learning Strategies: In the Case of a Three-Week English Program. *The bulletin of the Kanto-koshin-etsu English Language Education Society*, 23: 47-58
- 木村啓子 (2011) 大学生の海外短期研修の効果への一考察—リスニングとライティングに焦点を当てて. 尚美学園大学総合政策研究紀要, 21: 17-30
- Llanes, A. and Muñoz, C. (2009) A short stay abroad: Does it make a difference? *System*, 37(3): 353-365
- 野中辰也 (2005) 海外語学研修の効果測定. 新潟青陵大学短期大学部研究報告, 35(35): 7-12
- 野中辰也 (2008) 海外語学研修の効果測定 (2). 新潟青陵大学短期大学部研究報告, 38: 43-49
- 太田浩 (2021) 高等教育国際化の未来：ポストコロナの国際教育交流を考える. 高等教育研究, 24: 111-130
- 大津理香, 佐竹正夫 (2016) 短期海外語学研修はどれほどの効果があるのか—常盤大学の場合. 留学交流, 65: 16-24
- 大塚賢一, 根岸純子 (2009) 2週間の海外短期語学研修がスピーキングfluencyに与える効果及びfluencyと英語使用不安・英語授業不安との関係. 関東甲信越英語教育学会研究紀要, 23: 59-70
- Owada, K., and Shimizu, Y. (2020) Bridging Learning and Testing in an EFL Curriculum: Pursuing the Effective Use of a Commercially Produced Speaking Test. *JACET Selected Papers*, 7: 138-159
- Pearson Education Inc. (2019) Versant™ English Test: Test description and validation summary.  
<https://www.pearson.com/content/dam/one-dot-com/one-dot-com/english/SupportingDocs/Versant/ValidationSummary/Versant-English-Test-Description-Validation-Report.pdf> (accessed April 7, 2022)
- 瀬尾匡輝 (2021) オンラインによる海外留学の可能性—コロナ禍におけるブルネイでのオンライン短期海外研修の実践から—. *The Journal of Worldwide Education*, 14(1): 4-18
- Shimizu, R. (2000) A Short-Term Study-Abroad Programme and Changes in Learners' Spoken Performance. *ARELE: Annual Review of English*

[資料・報告]

*Language Education in Japan*, 11: 101-110

清水裕子, 桐村亮, 野澤健 (2014) 経済学部英語圏短期留学プログラムにおけるスピーキング・テストの実施とその結果報告. 立命館高等教育研究, 14: 91-102

鈴木理恵, 林千賀 (2014) 海外語学短期留学の効果 学生の言語的・情意的側面に見られる変化. 関東甲信越英語教育学会誌, 28: 83-96

Tajima, C. (2020) Language and Cultural Learning in a Short-Term Study Abroad: An Investigation of Japanese Sojourners in Canada. In: Goossens R., Murata A. (Eds). *Advances in Social and Occupational Ergonomics. AHFE 2019* 572-577

田浦秀幸, 堀井耕太郎, 馬西卓徳, 岡田宏子, 清水大介, 柏本恵未, 戸成辰也 (2009) ニュージーランド短期英語研修の効果に関する一考察. 言語文化科学研究 (言語情報編), 4: 1-22

上田恒雄 (2021) 短期海外語学研修の効果一言語的側面に見られる変化一. 人間文化: 愛知学院大学人間文化研究所紀要, 36: 238-228

Ueda, Y., Tsuboi, N., Nakano, S. (2021) 3-day Collaborative Online International Learning on Sci-tech Challenges for Sustainable Development Goals. *JSEE Annual Conference International Session Proceedings 2021*: 38-43

植村友香子, 和田健司, 田村啓敏, 徳田雅明 (2021) ブルネイダルサラーム大学との連携による COIL (Collaborative Online International Learning) 型 Global Classroom の実施と BEVI (Beliefs, Events, and Values Inventory) テストによる学習効果測定を試み. 香川大学インターナショナルオフィスジャーナル, 12: 25-38

吉田三郎, 小寺光雄 (2009) 短期海外語学研修が高専学生の英語力にもたらす効果. 福井工業高等専門学校研究紀要 人文・社会科学, 43: 111-122

---

2022年5月26日受理

† Hiromi Hadley\*

Educational Effects of Online Short-Term Study Abroad:  
Focusing on Speaking Ability

\*International Education Center, Institute of Education and  
Student Affairs, Niigata University 8050, Ikarashi 2no-cho,  
Niigata City, Niigata, 950-2181 Japan